

〈資料紹介〉 翻刻『振袖天神記』(下)

翻刻の会

- 一、底本には京都府立総合資料館の七行九十一丁本を用いた。
 - 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
 - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
 - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
 - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
 - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
 - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
 - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
 - 7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
 - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
 - 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会(学部学生の研究会)の会員によってなされた。

芦野陽子、浦野洋紀、小林美美、石橋佐紀子、竹田奈央、中村梨恵子、日當真心、水田千尋。
- 文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

(山田和人)

蘇生梅 振袖天神記 (下)

翻刻の会

第三

恋はせきやるな浮世は車。命ながけりや廻りあふ。夫レを頼みのとけしなや。

月日も俱につむ米は曾根村中の年貢米。納て戻る明き車。綱引き捨て牛飼共。サアくちつと休んでいこ。扱マア今年シは十分シの物成りきつい上作。ヲ、互作のいやる通り。近年シ覚ぬ豊年シ是では世界の人間シが。安い米喰て気入ずに。乞食も犬も肥るである。イヤ米の事で思ひ出す。あの軒シ米の牛頭兵衛め。在所へうせて聞もないに。何に寄す出しやばつてのさはい立テ。所に若い者もない様に其上ちつとほこ前も有ルかして。去りとはがいこつとき張(44才)

どこぞでた、んでこまさ成ルまい。ヲ、てや。おいらも胸が悪ルい。あいつはマアどこの牛の骨で今迄何しておつたやつ。此村へよせても畠仕事は働らかずのら付てけつかるが。此辛い世界にあ、して暮せば味い物。何シでも合点の行ぬ物じゃぞよ。さればいいい。夫レに付いて気ぶさいな事聞た。道々われ共談合せう。サアおへくとめいに。させいほうせい引く車。牛は牛連レ帰りける。

早牛も淀遅牛も。淀ならなくに諺。爰に引かる、牛車取ルべき綱は徒に。牛飼人の乗りながら尻を枕は唐人の。顔回ならず寛怠に踏延す脚。松原も歩むと見へしとろく目。きしる車が高軒牛もねむさや。おこすらん。さす日恨そ水(44ウ)仙は。霜消てさへ美しき素颜でもよい女房の三十にはまだ二つ三つ。愛は取分兄弟の。子供を連していそくと。堤伝ひを歩くる。

殊地色中に血をの緒をとあいたてなふ持テ余したる弟は。五つ計りのわんぱく者。詞コレ姉様ハル。其人シ形はわしがのじや。なぜお前が持つて来た。返地ウしやくくと振袖を引キしやなくなるやら擲ハルやら。逃ウるを追ツて泣なわめく。母ウがとらへてコレ色くぼんち。又無詞理いふてじや、踏ムのか。そしてマア勿もつた体たいない。姉様シを擲イたら此手ニかくさるぞ。人シ形がほしいならよいのを鼻かが買カてやりましょ。それ共又いふ事聞ぬと。と、様シに告つげたらいつものひねく。ヲ地ウ、こはやのとおどしても。イヤ詞く外の外のはいやじやあれがほしい。お地ハルこせくとくはんぜなさ。コレ其様詞に仕やるとアイ(45才)そこねるわいの。ほ地ハルしかかそふとおとなしく。オ詞、姉は年かさ賢かしい。そんならちとの間借かしてやりや。其かはりべムぬやるならよい切レか、がやりませう。源次郎のわやくで思はぬ隙人。内にはば、様待てて有ふ。独ひとりあるかすと果るこつちやない。ド地ウレ手々引テてやりませうと。右ウと左ニに月と花。一つ詠なめの親心。子フシカにてはうさを忘れ草。道フシくさながら。行先キの。

浜地ウの上野に引キ捨し。車ハルの上ハなは色こちの人。オ詞、コレ道中チにめつそうな。そして此こさむいのに風フひこと思ふて。牛殿も牛殿。主シは寝て、有ふと儘。われは引テて戻りはせいで同し様に。ヲコはあの軒いびわいの。コレ起おきさんせくと。ゆすれどさらに白川夜舟。弟ウは車カにかけ上り。と、様シ戻れと幼いた気けな。楓ウの手(45ウ)先中撫なる顔。ムンとふんぞる伸のび欠ひ。エ、味うまい最中ウをつめたいほどと起直ちり。目ハルを摺すり火ひ燧ひかつちく。コ詞リヤ女房共。子供を出しにそなたののらか。内を明メてどこへいたア、嗜ためく。ヲ、名立なテかましい事計しり。わしがいつ片時し。からい世帯せたい持たながら優ゆう長ちやうらしい遊山ゆうざん所か。いしこらしい女房にやうぼう呵かるこな様シが。いつぞやから昼ひるは間まがな透とがな高枕たかまくら。火ひを見みるとかけ出し待まて共いかな戻もらばこそ。たまさかに一こと言こともどこへといへば顔付かほづ悪わるルう。女房にやうぼうに物ものを云いさぬ仕方しかた。かういや恪いん気きと思しはんしよが。大事だいじのく母御様ぼおさま。なんぼ

おまめに有連も。お年寄りは何シ時知レぬ夜歩あるまはやめてほしい。コレ今迄とは違ひます。立居出入になつこう。と、様よか、様と慕したふ(46才)子供のひかへ糸。と地ハルいて仕廻ふて新しいよいたの樂しみが出来たかへ。男ウは松女は藤。松有ウればこそ藤もはふ。男ハル頼の女房の身必悪ルい外心。持ウッてばし下さるなと目には涙の早浮み。ほろりと泣フシカす上手者。ア、瘦世やせせたい帶苦にもせず異見みけんまじ交りの御肝積かんややく。ようマア物を合点せい。今迄こそ主人といふ仕送り宛まてに。浮世狂ひも成ウッた物。此身に成ウッてそこ所か。そなた連も御所方に勤の内を互の樂しむ。か地うじて腹に申分ウン。人を頼ウんで産落うみしたあのおそね。御奉公ウの余よけいにてどふやらかうやら育はこむ中チ。思ハルはず不慮りよの我浪人色。そ詞ちが古郷の此曾根村。夫レを便りに足を留メ。とくれこくれくらす中又もぶんじた弟め。一人リならず(46ウ)二人の首かせ。か地、り人は有リ大事の母。何ウンば生れた所でも両親ふたもない女房色の事。世話は互友持かせき。又畜類ちくゑいならしらず。名は牛頭兵衛ごづでも我等人間シ。義理も情もしつてゐる。面白おもしろいといふも世に有時。見る事聞事無常心に成ル時節じせつ。譬たとへ天女が天くだり。情所見せかけても七里けんばいいかな。氣は写うつらぬ。氣遣地ひのきの字には長点シかけたりこちの弁天べん。船ウナまんぢうの取柁なぢも今宵ウの風まん取かけるぞ。船玉清ウめ待ち給へと。ざウれてか、ればはいやりと。もろき女松のむず折ウレに。必ウそふかと目でしむる。エ、愚痴ぐち者めと呵ウるのも。根ウが睦むつまじき女夫中。跡ウは笑フシひに打ウやらぎ。ヲ、夫レで心が落付ウいた。嬉ウしい事は取分ウけてけふ(47才)は弟が誕生日。かはいや姉と違ふて。物事不自由な其中で生れた故に。不便ウしさは猶増物を。夫レさへもせはしない時々は。呵ウる計りの捨育そだち。子供は夫レが葉やら虫腹一ツつ痛ませず。二人リも二人リと達ウッ者もの。皆神仏の御守りと氏神様へ参ウつて来ました。ヤレウく夫レはめでたい事。エ、連ウレ立ていのけれど。幸ウいの明ウキ車。枯柴かれしばつんで跡ウからいの。母人も待ウて、あるそこへ帰ると申ウておきや。定ウめてお神酒みきが。ヲ、有ル

共ハル。上々もろはくちきう諸白馳走ちきうぶり。何地ハルはせね共おなまにてちよつと計りの内祝祝中ひ。早ウう戻つて下されと。咄ハルしの内に弟は。牛ウとき
放し人シ形を。しやんと打乗セはい色くく。ソリ詞ヤ殿様シのお通りじや。先ハルきのけくヤツシツシ。姉地ハルは小哥をしほらしく。
宵歌ハルは首尾しゆびなしふけてはさはり。(47ウ) 四ウつを限りの夜ウルのせき。とかく丸寝ウに縁ウが有ルよいやな。よいや拍子ウに。引ウク綱ツの
牛ウもほ中るや。よねんなく。母も引カれて。立フシ帰る。
空地ウを詠なめて牛頭兵衛ゴウブは。ア、どふやら又曇くもつて来た。ふらぬ先キにと堤つみをさがり折取かれえしほ中枯枝柴しほ々も。願行ウにおこたらず切せう磋さ琢たく
磨まハルの功かうを積つむ。天台僧たいウと覚つししくて厨子かたせを肩背かたせに覆おふ笠きり着つつ。馴なれ中にし麻衣あぎウの。袖ウに嵐しのぎを凌兼う。暫ウしは松の下やどりつかれ勞うを。は
らし休居フシる。

こなたは漸やうく柴引ちきりつからげどりや爰こでこそ楽たのしみ草。腰ハルさげの庭打てふるひ。なむ三煙けかりの種たねが絶たへた。エ、ないと思へば一ハル
いたまらぬ。ヤ幸イの修行者しゆぎやう。定たしなめて嗜たしな有あである。寺地ウから里さとな事ことながら。たばこの無心むしんち立寄たつて笠かの内見うちみるより。ハア
こは僧正そうじやう(48才)にてましますか。ハ、思地ハルひがけなき御対面ごたいめんと両手りやうてを。土つちにつくく中と。遍照へんしやうもや、打見うちみやり。ヤアなつ
かしの武任ぶじん。汝げは善ぜんの勘氣かんきを受うて郷民ごうみんと成なりし由よしゆ。あつたら敷しキ良臣りやうしんを。失うはれし残念ぜんねんと兼あては思おもひ有あけるに。堅固けんこの体
は満み足あせり。去さりながら。浪々なみなみの身の苦く勞らうにやハテ面おもてかはりせし者ものかな。譬世たとへにふるたつきにてなす業わざこそはいやく共とも。
心こころなぞみそ蓮葉れんえつの。清きよき音を忘わすれなど。詞地ハルに武任頭ぶじんかぶをさげ。ハ、有詞難たき御教訓ごきやうくん。殊更ことごと又御主人ごしゆじんとは。したしみ厚あつき御
方様かたさま。見奉みまうればいと猶なほ。思おもひ出す主君しゆきみの恩義おんぎ。忘わすれぬ弓矢ゆみやも山田守やまだのりかがしのごとき土民どしみんに迄いたり。膝ひざを折腰せつゝかがめ。今日けふ
の露命つゆめいをつなく口惜くちやくさ。所詮ところせん腹切相果はらきあひんと幾度いくたとか取刀とりたにさへ。(48ウ) 面目おんあひもなき次第しだいなれ共恩愛おんあいの悴せがしが事こと。老おたる

母を誰レか又。育くれん者逆も。歎きくらせし此年ノ月。仏神に祈誓をかけ朝夕願ひし驗にや。ふしぎにも軒端の御方に廻り逢。何かの様子残りなく逐一に承り。直ク様我家に御供し御かくまひ申せ共。世上を忍ふ御身なれば。とかく人目を憚りながら某が縁者と計り。女房に迄心救さず。力のつゝかん程迄は。随分いたはり参らす。せめては是を申立テに何とぞ勘シ氣御救免受テたさ。お家の大事聞ク度に。拳を握り牙をかみ。儼しやれあはれ御救シ有ならば。逆ク臣めらが首引キ拔ん。若シ運尽て敵に囚はれ。骨を碎かれ膽を煮共。心は鉄石夫レこそ本シ望。忠義の為に命を(49才)落さば。いか計リ母も悦ばん。さすれば忠孝全くて武士の数にも呼れん事生前の面シ目。此上の有べきか偏に御取成。御推拳頼奉ると。低頭平身手を合せ涙と俱に願ひける。遍照も感涙に。衣の袖をしほられしが。実武士の上にては義心は重く一命は。鷲毛より軽しとや。誠に節なる志。何かはあしく計はじ。殊更に我娘汝が方に忍ぶよな。心尽し思ひやる。扱もく世の中に節なる物は親子の愛情。雲井の鶴は月かげのさやけき空と思へ共。子故の闇にかきくれて声をかはして鳴クと聞。世を捨人の我ちさへ有俗にかはらぬ思ひして。いづくにさまよひ有やらんと。心苦しく有つるにラ、過分シぞや。悦はし。何をかな報恩せん。や是(49ウ)幸イと背負たる。厨子取おろし。いかに武任。此内に安置せしは十一面ノ觀音の御尊影。其方が志ヲ精誠成ルに依て。天帝より暫シの内預ケ給へる秘仏なれば。凡夫の眼にか、らぬ御頼も。慎信心せよ。ナ心得たるか。ハ、、、冥加に余る御賜。某授り守護するからは。泰山は前に崩れ。麋鹿左右に奥間共いつかなく。併シ安キに有ても危を忘れぬこそ肝要。事に寄ツたら女房も離縁致さば跡は母也稚き悴レ。肉身の者共計リ必御安堵下さるべしと只一心に凝たる魂。ホ、頼しく。既に海内穩ならず。朝敵名虎が權威に恐れ。きのふの味方もけふの敵。笑の

中に刃やいばを含今此時。いかでか心を安きに置かん所もなし。エ、浅間しや。日月ツ(50オ)光り覆おほはれて常闇とこやみの世と成りけるか。ハ、勿体もどたなや恐ろしと。智徳兼備ちとくせんびの目の内に。無念ウの涙なみだはらくく。霰あられたはしることくなり。ヤア忘れたり。是よりも我十方に馳廻はやり。仏勅ぶつちくを頭かぶに戴いたき。衆生の輩とも味方に導みちびき。十悪五逆じゅうあくごぎやくの怨敵共うんてきども縲るい縲せつの繩なはにからまき。護摩ごまの利刃りけんを打立色テ。追立こどくテ。悉しゆらく修羅しゆらの街あまたにほつ下色し。再び無為むゐの王城わうじやうを。建立ごんりやうなさん大願おんなれば何とぞ神りやう慮ふ智ちに叶あひ。やがてめで度吉左右せん。先ウッ夫う迄いはさらばく。ハアおさらばと見送みおくる義者ぎしやと見返みかへる行者ぎやう。忠臣ウの道一筋みちひとすぢに足を早あめて急いそがる、。

跡あとには御厨子車ごくしに乗よそめを覆おほふ苦幸くるしやう。引緒ひきいとふてゐる所ところへ。蚤取ひらきり眼まなこに以前いぜんの牛飼うしかひ。走はりくる(50オ)より牛頭兵衛ごづぶが腕うで首くび。双方ふたうよりむづと取と。われはく醜みにくしい働はたらするな。此街道かいでうは昔むかしから用心いしんのよい所。此比こゝは物騒ものさわで。夕部ゆふべも剥はいだ取とれたと昼ひるさへ人の通りが薄うすい。慥たゞに見たはけさの事。此松原このまつがらのはづれに。殺ころされてゐた飛脚ひきやくの死骸しがい。傍そばに有ありたばこ入いは。われがのじや見しつてゐるか。譬たとへ又人違またひとちがへでも大事だいじない。ぐつと詮た義ぎしぬくのが所の為。代官だいかんへ連つれて行い。きりく歩あゆめと引ひツ立たる。ハテじやらくと手合てあすな。人をおどして楽しむのかい。覚おぼがなけりや何共思なにともはぬ。ヲ、覚おぼが有あるかかないか。此マア車このくるまがきぶさいなど。立寄たよりル二人ふたりが首筋くびすぢ。掴つか。ばつたく投なげられひるまぬ我武者われむしや。つかみ付つかみカんと立たかゝる寄付よせもせず蹴けすへる金脚かなすね。脾腹ひはら蹴うられて息いきひい。うごめく二人ふたり(51オ)が吭のどを両方一度ふたういちどに土足どそくのとゞめ。骸からだを直ただクに池水いけへ打う込めむやくめつ入相いりあひの。鐘かねも幽かすかにほのぐらき。木影きかげに隠かくれ女房にようばうお松おまつ。様子ようす聞きケ共何気ともななう。今来いまた顔かほで走はり寄よ。コレこちの人ひともふ日も暮くれしたに何なにしてぞ。きつう遅おそさに迎むかひにきた。サア連つ立たッていにませう。イヤまだ庄屋しやうやに用もちも有あり。いたらば

定めて隙がいろ。そなたは先キへ。いやいぬまい。もふそうくは釣れまい。こなたはほんに夜ルの殿。だましよい者じや迎余り化して貰ふまいと。ずつかりいふ顔剣刃。納めてもない差向ひ。イヤいはして置ケば又しても。男をやり込めいけず者。いつも日和りと願がはしやくな。ヲ、じやくは時雨の降りかゝる身の行末が案じられ。碇失ふ放れ松風に任せてゐる様で。心の安(51オ)まる事が無い。畢竟が今迄も二人りの子供が有ればこそ。さでなきや何の不自由らしい。此広い世界じや物。男日照りは行まいし誰か付キはつてゐる物で。悪ク性のせいとうに。根も愛そも尽果た。ヲ、おれも儻レが常からの。悋氣深いにうんじ果。けふはほいまくろかあすは擲出そかと。思へど子供が不便さに何ぬかしても耳つぶし。聞ながしてこらへたが。もう虫が聞かぬぞよ。コレそつちが聞てもこつちが聞ぬ。いや近付キの縁者のと。引ッこんだ掛り人も。てつきりかたげて来たのである。サアそふでなくばありや誰レじや。ヲ、妾じや。何じやおてかじや。ホ、ホ、ホ、恥しうもなうてよういはれた。ヲ、結構な御身代じや程にゑようが道理。ほんにまゝよりおすき(52オ)じやの。そんなつまらぬ男に添て居て面白ふない。一向隙取ル隙おこしや。ヲ、やらいでは。去りこくるとつちへ成と行おらふ。行コと行まいと入ぬお世話。隙取たらこつちの身。どふ成と勝ッ手にする。ヲ、勝ッ手にせいと云ちらし腹立紛れ引ク車。工合損ねし女夫合。離て夫トは行水の元トへ返らずよどみなき。我レが心を人しらで汲取ラぬこそ是非なやと。涙ぐんどく独言。いとしや氣苦勞さしやんすのふ。とはいふ物の聞へませぬ。最早十年セの上越して馴染重た女房の心。しらすにかいのどふよくな。軒端様の御身の上。なぜ隠して下さんした。お袋様もお袋様。お前はしつて、あらふのに。つかうくと打明けていはしやんせぬも無理でない。生れ賤しいわたし故さが無い心も有ふ(52ウ)かと。疑はるゝが恥かしい。こんな事なら死しやつたと、

様ウンがうらめしい。なぜ百姓ひやくしやうで有あったぞい。侍さむらいイの娘むすめなら。是程このほどには思おもはれまい。夫つまレはとも有あレ悲かなしいは。いかに忠義ちゆうぎの為ためじや
迎むかひ。浅あましい。非道ひだうの業わざ。夫つまレも何故なに金がかねなほしや進すすめたいと思おもへどはかない女おんなの思案しあん。わしや室むろの津つへ身みをしづめ。勤奉きんほう
公こうに行います。跡あとで子供こどもが尋たずねるなら。よう云聞いせてやつてたべ。嘸ま姑こ御ごのお世話せわである姉あねはまだしも女子おんなだけ。聞分きぶんケも
あろけれど。乳離ちひなれさへもせぬ弟あに。ちよつと昼寝ひるねの現うつつにもわしが肌身はだが添そいでは。寝ねにくがる物夜ものよルは猶なほ。誰たれカすかしたらし
た迎むかひ。何なにシの聞分きぶんケ有あル物もので。わやくいふ迎むかひかならず。きつうおどして下くださんな。ひよつと虫むしでも出でようかと。案あんじら
る、氣き（53才）にかゝる。お前まへも随分ずいぶん身みを大事だいじに。持病じびやうの胸痛いたおこさんすな。あから様さまにもいふならば。よも得心とくしんは有あル
まいとわざと去いるゝにくて口くち。ほんまにあいそ尽つかさずと。別わかれてゐても夫婦ふうふじやと。思おもふてやいの頼たのむぞへと傍そばなる人ひとに
いふごとく。胸むねの有ありたくどき立たいふても。尽はぬ思おもひなり。浜はま邊べの方になか泣な声こゑは。我われを慕したふて兄弟あにいが。尋たずねて来きたかかはいやと。
行いんとせしがいろやくやく。どとふで別わかれる身みじや物ものを。なま中途ちゆうずたら離はなすまい。さはいちよつと顔見かほみせて。得心とくしんさそふ
かさすまいかと行いては戻かへり立たつ居ゐつ。心こゝろに定さだメ兼かいづれをよしや芦あしのかけ。音ねを泣なさして忍しのびる。
不ふ便べんやな兄弟あにいは。ふふききに笠かさをとられしど。おさおさ（53ウ）ゆれば又また浜風はまかぜの裾吹すそふキ上うて身みに通とほる。寒さむさ絶た兼かちよこく走はり先まへキ
に成なては跡見あとみ返かへり。おおくれては呼よび招まねき合あ互ごにいたはり雪道ゆきみちを。泣なくたどるぞぞいぢらしき。コレ源次郎げんじらうさむいのふ。つめ
たかた、してやらふかや。いやくつめたうてもだんない。そんたいか、様さま呼よんで下くだんせ。おりやねふたいわいの。ヲ、
ねむたかろく。エ、胸欲どうよくな。か、様さまどこへいかしやつた。わしも逢あいたい。か、様さまのふ。迷ま子のくか、様さまやいと。西にしに
走はりつ東あづまにさけび声こゑも枯野かれのに身みを打うち臥ふ。泣なを友ともかと磯いそ千鳥ちどり沖きの。かもめも音ねをそへて。いといと、哀あはれを聞母きこものこたゆるつらさ

は子の百ひやくばい。いつそ此世になき身みならかうは有あまいいたくしや。身捨みすてて是がどふ行ゆかれふ行ゆねば心の義理立ぎりたたず。つれなふ(54才)するもかはいさ故。やつぱり子の為ため夫トおとの為。なかじくと喰くしはる袂たもとを口くちにかいもなくわつとの声こゑを吹送ふきる。風の罅ひびに聞きまがへ。あらぬ方をばかけ廻まわり。どこにいさしやるか、様のふと。尋たずねがれてそこよ爰こゝ。慕おぼふ姉弟あねいしたはる、母ははは魂たま身に添そはず傍そばに有あとは白妙はくまうの。猶なほも類しるに降くだり隠かくし姿見留すがたメず只ただうろく。のふか、様さまが。コレ爰こゝにと。すがるは松まつの並木なみぎにて。ねぐらの鳥とりの立たさはく。羽音うぶねトに恐おそれちりぐに。別わかれ迷まよふて。三重みへへ行末ゆきすえは。

袋ふくろ文字ふみじ。牛うしのつつの文字ふみじ直すくな文字ふみじ。ゆがみ文字ふみじ共思ともはれて。父ちちを慕したひの言ことの葉はに枝えだもたは、の夜よルるの雪ゆき。白井しらい太郎たろうか情なさけにてふしぎに立寄たよりルる軒端のきの方かた。血筋ちぢんの縁ゆかりのかしこくも。菅三かや君きみも(54才)又爰こゝに。同おなし舎やどと成なながら。親おや子こといはぬ遠慮えんりよがち奥おくと。口くちとに隔へだての住居すまひ。夜よルる昼ひるかはらぬ問見舞とみまひ。

障しょう子じしづかに音ねトなひて。まだお休やすミ遊あそはさぬか御機嫌おんきげんいかと押おシ明あくる。あやしの一ひとトと間まに御注連繩おんしゆめなは。早はや十二才じふにさいの菅三かや君きみ。白木しろぎの机つくえに寄よりかゝり。長ながび給たまふ御風情おんふうじやう。ノウ申のうまをん。八才はつさいの御時おんときより叡山えいざんにて御手習おんたねひ。四五年しごねんの内に御学問おんがくもん。人に勝かれし御発明おんはつめいも理ことわり。いく夜よさもくついに御寝おんねなる体ていも見みへず。左様せがやに精根せいこんをお碎くだき有あてはお命いのちもたまるまい。もふ今肖いませうも明あけ方かた近ちかし。少ちとシは間睡遊まどろみあそはしませと。我わが子こといはぬ挨拶あいさつも案あじに。見みゆる真実心まことこゝろ。ヲ、伯母君おおははきみの御不審おんしんぱんは理ことわり。比ひ程ほど眠ねの間まを惜おしむは。手習たねひひ読書よみかきの為ためのみな(55才)らず。深ふかき心こゝろ願ねがふ有あての事こと。我父わがちちは善卿名虎ぜんけいなこに随したがひ給たまはぬ憎にくしみ。押お籠かごて擒とりことし。此こゝ比ほどは御命おんいのちを失うしなひ参まゐらせんとの計はからひ。其元そのもとトとは姉桂姫あねきぎひめと。此三丸このさんまるをかばひ給たまひし故ゆゑなれば。我故父わがちちの命いのちを断たつ事こと。思おもへば悲かなしさをなく。父ちちのかはりに我命わがいのちを取とつてたべと。天あまに祈誓いのちの三日三夜さんじつさんや。願ねがふ成就じやうじゆの其験そのしるし。これ御おんらん

ぜ。此一枝は庭の松か枝。風も折ぬに片枝の 忽枯しは。我命の終るしらせとなんぼう嬉しく。日頃信する観音経。明日の日の出迄に一千遍誦終らば。長き別れと思されよと。思ひ切たる御詞。初めて聞たる身の悲しさ。御尤とはいひながら。お前が先立給ひては是善卿のお志も。却て無足に成ル道理。わらはがつらさも(55ウ)思ひやり。どふぞ御思案直され。下されかしと吒泣しんみの愛ぞ道理なる。立聞老女埋木がわざと様子は白髪笑顔。竈のおき火すくひ持チ。ホ、ホ、ホ、こりやまた夜も明ケぬに早いお寝ざめ。お寒ふござりましょ。したるが年が寄ルととふから目が明いて。裏へ出て見りや二三日の降つゞけで。空は真黒庭は真ッ白。雪かく次手に落た柘榴。後チ程お菓子に上まして下さりませ。是はくようぞ心が付たれど。煮焚せぬ生物。大事のお身には上られぬ。殊更どんな毒虫が付いて有ルまい物でもない。とかくお命長ふなければ。ソレく益に立ぬわしらでも長生キには飽ませぬ。まして菅原の公達様。悴レ(56オ)太郎が子迄有ル女房去つたも。あなたを敵にしられまい。お命大事と思ふ故じやござりませぬか。ホンニいとしや二人リの子供衆。母御をしたふて泣てばつかり。寝ルにねられず 自も夜ルもすがらの貰ひ泣。武任殿の心根を思ひ廻せば廻す程。猶大切ッなお前の身。御発明はよけれ共お片意路なが玉に疵。松の片枝枯た連一ト筋な思し切。お前は父様の命乞。わらは、お前の命乞。枯したる木にも花咲くは観世音の御誓。此松再び青葉して。お命救ひたび給へと心にこめて一枝を。裏の小庭へ植に行。君も遠に母上の。慈愛に心夜半の風。ふせぐ障子にしらくと。灯火しめすしの、めの。暗い世渡りふる雪に。面は(56オ)埋むしら商売昼夜まだらの鍋墨顔。夜働きの帰りとは近所へ隠す。気暖ひ。外はのぶとく我内へ。おづく戸口しめ明ケの。音も聞しるぬからぬ母。太郎帰りやつたか。嘸寒からふ。マアくあたりやとゐろりの火。ほたくもやす

松中の木の。膝ひざまくり上母者人御免あつらなされと挨拶あはらは昔残りし親子中。わけて今宵はきつい冷ひや。彼お二人ふたりりは御機嫌きげんよいか。先ツ悦うこんで下さりませ。今いま夜はしつかりとよい設もうけ。何でも手てごたへ十四五両。首にかけてゐるやつを一つかみ擱つかみにヤアくそりやアノ殺してかアイ。イエくそこ迄は行ね共ともはひ取た路金ろきん。まあ是で百日余りの賄まかなひは慥。御安心ごあんしんなされませ。ヲ、そりやまあ嬉しいく。が逆さかもの事なら正道な。天あまの(57才) 恵めぐみの賜たまひなら恭かしこふも思おもはふに道みちならぬ世渡り。人の報むかひが思おもはる、ア、氣きのよはい母者人。主人しゅじんを御世に出したらば。百金ひゃくきんは千金せんきんで返す。暫しばらくく人に借かルといふ物。思おもひ込こんだ事立ことたテ通とさねば置おかぬ武任。コレ此小柄づかは京都きんぎよにおいて。朝敵名虎あそだにこに打うかけた眉間まげんの血ち汐しほ。かはかぬ中ちにきやつが首提ひつさげんと思おもひしに。早はやうかくと五年ごねんの月日。血ちは切先きりさきに鑄そ付け共とも。名虎なこが威勢いせいは夜よに増ま日に増ま。見る度みヒ聞度きの無念むねんさ。悪人退治あくじんたいぢする迄までは。いか様の艱難かんなんも厭いとはぬく。サア其名虎なみこをおぬしが力で討うツ事はならぬぞや。ソリヤ又なげな。サイノウ。何程念なにぢ力は堅かたまつても雉子きしと鷹たか。一天いつてんの君きみの御運ごんひらくる時節じせつのこぬ中ちは。中々ちんぢんく討うタれぬ名虎なこ。そなたの(57ウ) いつもの性急せいきでは。敵てきの為に犬死いぬじをめされはふかと氣遣きぢひな。お主おまへ忠義ちゅうぎを思おもひ過す。して勤こ当受とうじゆケ。山賊さんぞく夜盜よたうの世業せぎやくに非道ひだうの金かねを戴いたいて。悦うぶそなたの底心そここころは。嘸さそ口惜くわからふと母親ははの。くどくきに心武任しんぶにんも思おもひ廻ませば身みの不運ふん。去しッた女房にようぼうの事迄ことごとも忘れ兼おんあたる恩愛おんあいの声こゑに目めさます呼より鳥とり。源次郎げんじらうはまだぐはんぜなく。か、様さまに逢あたいか、様呼さまよんで泣計なみだけり。姉あねは年としだけおとなしく。申まをすと、様さま。此こか、様さまは何なにとして戻かへらんせぬ。夕部ゆふべも源次げんじをば、様さまとわしと二人ふたりりして寝ねさしても。何なにほでも寝ねやらす。乳ちが出でぬ逆無理さかむらばつかりやります。ちつと呵しかつて下くだされとなくく父ちちに取付とケば。エ、めろくくと侍さむらいの子この様ようにもない未練みれんなやつら。コリヤやい(58才) おそね。母親計ははのけいりが親おやで爺親おぢは親おやでないか。若わくと、とか、と喧嘩けんかして

縁切つた時は。わりやおれが子に成ル氣か。但シか、が子に成ッて出て行心か。夫レいへどふじや。返ン事せぬはか、が子じやな。エ、其根性こたやうなら儕しやうしも追出す出てうせおれとおどせばおとされ。ア、申わしやと、様の娘じや。堪忍かたじんしてとおろく声。ム、出かした。コリヤ坊主よわりやと、が傍そばに居たいか。か、が傍そばに居たいか。アイおりやと、様の傍そばに居てか、様の乳ちのが呑のみたいと。あどない孫まごを抱かかしめて。ヲ、道理じやそれがじよいの。アレ聞きやつたか。切ッても放はなしても放はなされぬ。こないたいけな子の有ル中を。別べつれにやならぬもお主ぬしの為。何なににもしらぬ此孫ここのまご迄。かはいや忠義ちゆうぎに瘦やせたなど撫なでさ(58ウ)すり懐ふところに。入いても老おいの肌寒はださむき。乳房ちぶさ尋たずる哀あはれさよ。

白しろい大道だいだう黒くろい汗あせながしちんば走はりに村ハルのあるき。牛頭ごづ兵衛べいゑ殿でんちやつとござれ。大きな事が出来た。貴様あなたに大きな詮せん義ぎが有あル地ち色いろに。入いても老おいの肌寒はださむき。乳房ちぶさ尋たずる哀あはれさよ。事。詮義せんぎの筋ぢん貴き様さましらぬか。サア大きな事じやが。詮義せんぎの筋ぢんは小ちいい子の事じやげな。ナニ小ちいい子の詮義せんぎ。ム、くときつくりとむねを脇道わきぢへ。ハ、まあ夫おで落付おいた追付おけそこへ。イヤ追付おけとは春長はるながな急いそじやくとせり立たてて帰かへれば跡あとに。うつとりと肝きもに焼鉄指やがねさしゆび哀あはれき。口くちにはいはず親おやと子が案あんじに。はつといぶきどの被はひ清きよめを。身みのすぎはひ。天津あまつ(59オ)祝詞のりとふと太ふとのつとかく聞きし召めしては罪つみといふ罪科とがといふ科とがはあらじと。しなどの風の天あまの八重雲やえぐもを吹ふきはらふ事のごとく。やい鎌かまのとがまをもつて打うはらふ事のごとく残のこれる罪はあらじと。被はひ給たまひ清きよめ給たまふと申事まことの由よしを。八百万やっぴやくまんツの神達かみたちチ諸共しよどもにさを鹿しかの八やちつ耳みみを。振り立たて聞きしめせと申まをす。ア、聞きたうない通とほらしやれ。コレく勿な体たいない事云ことやんな飯かひにも神かみの名代なご。殊ことにあのお方は事ことの吉凶きうきう善ぜん惡あくを悟さとつて。祓清はらひむる奇妙きめうな祓宜ねぎ殿でん。かういふ所ところへござつたも則すなはち神かみの導みちびき。おはいりなされお

茶上ふ。ハアお志忝こころざしい。扱今日あつの寒さむさ次イ手ながら竈かまどの祓地色中ちとの間爰まに冲津彦おきつひこおきをさがして馳走ちそうぶり。神かみは見通し
今日けふの只今ただいま此家このやの吉きち(59ウ)凶けう。善ぜんか悪あくクならば清地色めハルの加持かじを頼たのます。安やすい事ことく正直せいしきの頭かうべにやどるまほし引ひキし
め白幣しろはぎ。雪ハルの小笹こはすに鐘かね子の湯立ゆたてテ謹つしんで。不ウキン浄じやうを清フシめうやしくも。御地色圍おもての面おもてつくく考かんがへ。コレかみ様詞。此内ここのうちに
十二じふにに成なルる子こが二人ふたりリ有あルるか。アイ。いやこれ。いかにも一人ひとりリはおれが娘むすめ其外そのほかには。イヤ有あルるく。二人ふたりリながら同どうし丑うしの
年としシ。其二人ふたりリの中には非ぜ一人ひとりリは。けふ中に命いのちを失うしなふと有あルる御おん圍ゐの面おもてテ。どちら成なり共災難さいないを一人ひとりリに負おほせりや一人ひとりリは助たすか
る。こりや定さだまつた命いのち数かず。祈きたう禱たうの力ちからに叶あはずと六神むく通とほの占うらなひに親おや子こ互あひに顔見合かみあひせそんならどふでも二人ふたりの中なかハアはつと。
胸むねの合あひつしりと。逃のがれぬ松まつの片枝かたえだに力ちから落お葉はの。恨ふしなる。ナント違ちがひは致いたすまい。此こ(60才)上うへながら帰かへつても随分ずいぶんシ
と御きと祈いのち禱たう申まをさふ。高間たかまが原はらにかみ様ハルお暇いとまおさばらと立た帰かへる門かどトの戸かどを。外はらトよりはたと立た切きルる牛頭ぎし兵衛べゐ。こりや御おん亭てい主しゆど
ふなざる。イヤめつたには帰かへされぬ。丑うしの年としシの小兒こわら二人ふたりリ有あルる事こと。御おん圍ゐに委あみ細さいを考かんがへ。あんまり奇き妙めうな神かみ道だう者しや。ゆるり
とお宿しゆくが申まをたい。母はは者しや人ひと。必かならおれが戻かへる迄までどつちへも手放ばなすまいぞ。成なルる程ほどく御おん不ふ肖せうながら暫しばしの内うち。ハテかはつた事ことに
成なつたな。いか様さま寒さむいに帰かへらふより。暮くレ方かた迄まではお台だい所ところで昼ひる寝ねの岩いわ戸かど。御おん供くわうのお世よ話わに成なりませうかい。そんなら拙ちやく者しやはい
て参まゐる。短たん氣きを出ださずと云い拔ひケておじや。裏うら口くちに油断ゆだんなされなと心付こころづケ合あふ裏表うらおもて。明あケぬは神道かみだう。三さんツ柏かしは。子このワクリ(60ウ)手
を。引ひて納な戸かど口くち。只たださへ寒さむき雪ゆきの日ひにかわいや夜乳よにちがない故ゆゑに。此こいちけた顔かほはいの。ひもじからふに此こかちん。コレふう
して有ありたへやいの。姉あね迄までが同どうし様さまにいちくせすと源次郎げんじらうを。遊あそばしてやらぬのか。いつ迄までも子供こどもの様にごとに。エ、しとのな
いと呵しかられて。アイは、様さま。裏うらの寒菊かんきく折をて来たきた。コレ花はな。々とすかしても。イヤ花はなもいや餅もちいやじや。鼻か様さま呼よんでくれいや

い。アレあの様にいやるので。わしも逢たふ成ましたと。守地ハルする姉も俱中時雨。呵ウッてもおどしても慕ウふ子供は皆ハル尤。といふて逢ウすに逢ウされず。どふせん方も。涙フシながら。

ア、そふしや姉ウは聞分ケけよい者也。いつその事偽ウツつて思ひ切ハすか情ぞと思案ハ（61才）極めて。コレおそね。なんほ逢たかりやつても。もふ一生逢れぬそや。今迄は隠したが。か、は此世には居やらぬ死にやつたわいのふ。エ、イ。そんならもふ逢事ハはならぬかへ。なふ悲地ハしやか、様何として死しやつたと。立ウたり居たり。うろくウと騒ウげは我レもさはかれてせき上る胸中。撫女おろし。ソレくく其様ハなうろたへた事が有か。どの様に尋た辿。死シた者にとふ逢れふ。か、の居やる所は冥途ハの道。十万憶おくだ土といふて遠とをい所。我身も俱に死で行ねば。逢事ならぬ片便り。もふふつりと諦あきらめて。親といふのはと、様一人りを大事にして。是からそなたが、か、のかはりにおとなしう成なつて。源次郎を育またてにやならぬ合かてん点かいたか。（61ウ）アイく。悲しいか道理。賢い者じや思ひ切きりや。今から持ち仏堂の仏ケ様を。か、と思ふて拝おみやいのと。輪廻りんゑを切きらす方便ほうべんはいふても見る目いちらしさ。胸一ぱいにせくりくる涙。ほうしに立ツて行。
弟地色は一向がハル訳わけしらず。姉ウはなま中間分ケの有程いとゞあこかれて。母の寝卷ぬまきの脱捨はたを肌そエテに添ひ。抱ハルしめて。エ、か、様とうよくな。死しやるなら源次郎やわしも一所に。冥途めいととやらいふ所へ。なぜ連つれていて下されぬと。かひなき地ハル。くどきもぬけの絹きぬ。身に打ウかくれば弟ハルは。か、様抱ハルいてとしかみ付ツク。ノウなんほたきやつても。わしには乳がないによつて。わしや冥途へいてか、様を。呼ウんで来てやるはいのと。いへはにつこり嬉こし（62才）げに。そんならちやつとじよくはいて。おれも行ふと竹地ハルの子笠。取ウてあてかふ利はつ発者はつ涙片手ウに姉弟うまが黙まく。死出フシの旅用意ようい。待まちちやや。さつきにば、様のいはしやつた。冥途めいど

は遠い所で死て行かねばならぬげな。わしが一返り死て来て。わがみは跡から迎ひに来る。マア姉を先へ殺してたも。其死やうなは。わしがよふ覚えて居ると。智慧が敵の物覚へ。なかい未来の三尺帯。障子細目に差出し。コレ此端を引ばつて。南無観世音くんと。三遍となへて引いてたも。サアもふじやぞや合点かと。さすや障子の別れ共。しらぬ仏の名を力。廻らぬ舌になむ観世何のくはんぜも。へ引く度にあつと(62ウ)くるしみさけぶ声。耳にこたへて驚く老母。見ればおそねがたんまつま。ヤレかはいや何事ぞ。おそねくと呼生ける声は門トにも牛頭兵衛が。叩げと明ヶぬ戸打破り。薬よ水よに稚子も俱にうろ付く因果の廻り。母者人こりや何事。子供遊びの手合がかうじての過か。イヤくく。こりやけがじやないわいの。母を恋しいくが積つてこんなむざんな事。コリヤヤイおそね。くくと呼ぶ声も。枯野のいとじ漸とくるしき息も。たへくながら。ノウと、様。堪忍して下さんせ。か、様が死しやつたと聞てあんまり悲しさ。あの子がせがむが術なさに。冥途へ逢に行まする。冥途へ行のはいかふせつない苦しい物じや。もふ源(63オ)次郎は。やつぱりお前の傍に置いて。必死ナして下さるな。ば、様は目がうとし。わしやと、様に呵られても。か、様の傍に居ねば。綿つむ事や縫事を。教てくれる人がない。夕部ぬふた豆巾着と此清書をか、様に。ちやつと見せたい早ふ死たい。隣のお梅様に借て置いた羽子板を。葬礼の乗り物に入れて。跡からおこしてと。是を最期の詞にて。終にはかなく成ければ。老母は正体泣くつおれ。なま中思ひ切てそふ逆。愚なば、が偽りを。真実心シに思ひ詰。六道の辻でうろくと居もせぬ母を尋るか。かはいや不便と声限り弟を膝に武任が。思ひ切つても。はらくとあられ。たばしる涙なり。(63ウ)

か、る折から村の長先きに立てて牛頭兵衛殿。けさ山下の畠中。雪にまぶれた女の手負よう見れば爰の内義。追剥の所為

と見へてむごたらしう切おつた。笑止せうしな事と口々に白砂雪に埋れて。戸板こに乗せし乱れ髪かき分く見えれば。女房にようお松。ヤアア嫁かいの。誰たれしが切たきくと騒さわぐ中にもさつきの咄はな。若わシや夫トおとがしわざかと見かはす顔に武任ぶじんも。轟とろく胸のくらがりに切倒きたした其女が。扱あは女房にようで有たかと。泣なくも泣れず軋ある、計はかり。母ははと見るより源次郎げんじらう。か、様戻さまつて下さつたかと。血ちに染乳房ぞむちぶさに抱付かかく。ヲ、いぢらしやく。まだ虫の息いはする様なれど。逆さかも命は有ルまい。去りとは憎にくい盗ぬす（64才）人め。どこぞで敵取たかつてやる。回向えがうめされと云捨行い。手負ておの耳に只差寄さしコレお松。そなたの内じや。源次郎げんじらうじやわいのふ。氣を慥たに持もつても。か、様起さまてと稚子おきなの。しんみの一ト声通こゑしてや。母ははは今いまの目をひらき。武任殿ぶじん。よう殺して下さんした。夫おとレでわたしも。忠義ちゅうぎが立て嬉うれしうござんす。ヤアそんなら夕部のあの金は。室むろの津の傾城けいせい町へ。身を売うつた十二両。素性すじやう賤いやしいわわたし故。疑いはれて去いられた身。女房にようの金といふてはよもや受うけはなされまい。君傾城きみけいせいに穢けがさふより。夫おとの手にか、りたさ。身みの代しろお渡し申またさに。山賊さんぞくの道筋みちすぢにとふから待まちつて。居ゐたわいの。忠義ちゅうぎとは云いながら。もふ是切これきり（64ウ）で夜の商売しやうばい。やめにして下さんせへ。ヲ、そふじや共ともく。そなたを其心と知しつたら。去いらいでもよい物を。アレ見みや。一昨日おと、いから夜を寝ぬ子が。そなたの顔見て落付おいたやら。出でもせぬ乳ちをくはへて。すやくとねるわいの。ハア。是こゝが寝顔ねがほの見納みめか。姉あねはどこにぞ。おそねは爰こゝへなせ来こぬと。とはる、つらさ埋木スエテが猶更さら。顔かほも上かみ兼かみる。胸むねを定さだめて。ヤイ女房によう。何なににも云いぬ。親子三人忠義ちゅうぎは立たつた。未来みらいは半座はんざを分わけて待まちテ。姉あねと一所いしょに三途さんずの川がは。手てを引ひ合あふて渡わたつてくれと。あへなき死顔しがほ差出させば。ヤアおそねは死しにやつたか。ハア。はつと計はかを暇いとひ乞こ。なむあみだ仏ぶつ諸共しよともに。わつと老母らうぼの一ト声こゑに。わかちなけ（65才）れと源次郎げんじらうも。足摺あしずりしたる。血筋ちぢんの別わかれ俱ともに。雪共消ぬゆきともべし。

折地もこそ有レ先キ走リが声色高く。此家詞の内に御詮シ義有ツて。名虎公より御上使の御出成リぞと呼ばれば。武任ハルつつ立色扱こそく。最前詞シ様々云拔ケては帰リしが。弥いよく是に菅三君かんかくまひ有事けどつた上使。爰地に待チ受ケ母人ハは敵ウの様子を窺カはれよ。我ハは其間に御両所ハルを裏道うちらより落スが肝心かんじん。四方詞八方捕手とりての人数取かむ圍は定ちやうの物。一ト先地術てだてを以テ欺ア。若ウシ叶ハずば討手のやつばら何万はん人でも切ツて切死。油断ゆだん有ルな母人と。二人の死骸がひひんだかへ一ト間ハに入バ。母も一ツ世ハルの大事そとと裾引すそキ上。覺ウの差添さそ隠シ持チ討ツ手今やと待中ツ（65ウ）所に。名虎ウが家臣かしん荒川隼人はやと。軍卒ぐんそつ討ツ手の出立チならで。堂上たうじやう様の絹上下きぬモ故実こじつを正フシす供廻り。

老母地色ハルが前に両手色をつき。白井詞太郎武任公の母君埋木様にて候な。主人名虎より進シ上申ス寸志しの一ト所。御受納じゆなうなされ下サれと。白木地色ハルの台だいに錦うらぎの掛か。冠かぶり装束やうぞく揃そろへ老女をが前に飭かざらすれば。案ウに相違さうゐの母よりも障子しやうしを隔へだてて立聞ちか武任ウ。スハ何事の計略けいりやくと鏝つば元くつろげはやり男をの。切テ出ンず一ト間中には。様子ウ白ゆふ神ウ道者ちやう子細しいかにと窺うかがひ聞。

老母地色ハルさあらぬ顔色色にて。武任詞が本シ名御存シ有ツて。此所々の御進シ物は。扱ハは粉レが武勇ぶゆうに免シし。名虎公の御家来に。召シ抱かへんとの（66オ）御上使かな。イヤ左にあらず。我々が主人シと仰あおぐ迎むかひの装束しやうぞく。トハ何故に。イヤお隠しなされな。此茅屋ほうおくに身を潜ひそめする埋木様は。名虎公の北の御方。其御腹に御出ツ生の武任公は。主人の若殿疑ひなし。御有地リ家を承ハり御迎ウひの為シ參シ上。此装束ハを改められ。早御帰館きんかんと威義いぎを正して相述のぶれば。

太郎地色ハルが顛倒てんたう夢見しごとく。常々つね母の物物。我父ハは何人共しれずと計り聞タるが。さも有ル物の試こころみと肩口かたふつつと喰切くひ血ち汐しほ。小柄ウツの切先キそ、ぎかくればおのづから。錆付さびク血のりはぬぐふがごとく一トつに落ルる親子の血筋。血で血を洗フ同根どうこん同性しやう。扱ハ

は敵の胤たねなるかと。咽うに盤石ばんせき。呑込心地のむこころ。母ウもは(66ウ)つたと胸塞むさがり無量むりやうの思案しあんにくれ居いしが。ずんど立たッてヤイ偽いり者もの。非道ひだうの名虎なめが禄ろくをはむ。儕し等らが心こころにくらべ。覚おぼへもない表裏ひやうりを飭かま。舩ふね武任ぶにんが心こころを探たずねる穢けがらはしい送り物もの。持もッて帰かへれと丁ど蹴け。白フシ台たいあたりあたりに散乱さんらんたり。ム、すりや名虎公なめこうの館たねへ。御入有ごにりゆう所存しよぜんはないな。よし／＼此上こゝは敵味方てきみかた。隠かくし有あル菅三殿すげさんはい取とッて帰かへらふか。今いま一ひと思案しあんが敵てきか主人しゆじんの二ふたつの境さかい。暫しばくあれあれにて御返答待ごへんたうまちチ奉ほうり候こうと。礼義れいぎと權威けんゐの裕あはせはかま中なかカケリ。残のこし入いにけり。

始終しじうとつくと神かみノ道秘密ひみつ。聞きすましてつと出で。敵名虎てきなめに縁ゆかりを引ひク武任ぶにんが此家こゝに。大切たいせつツの菅三君すげさん暫時ざんじも置おかれぬ。渡会わたあひ太たばとふし。武任ぶにん様子ようす聞ききやつたか。母者人ははもの此世このよの対面たいめん是迄このまと。氷こほりの刃脇やぐばつばにくつと突つキ立たッてどうど座ざす。ヲ、尤なほじや。何なにノ生なまきてゐる氣きが有あふ。最期さいごは親おや子こ一ひと体たいと。抜取ぬきとル矢先やせんキ咽のんどに貫つらぬき。こなたの一ひとト間まに打向うちむひ。朝敵あそ名虎なめが血筋ちぢんの者もの。最期さいごの有様ようさま。是こゝへ出でてとつくりと。御覽ごらんンなされ紀中將きちゆうしやう貫つらぬ之殿のどのと呼よかくる。声こゑに開ひらくる障子ぢやうしの内うち。以前いぜんノの使者しやは引ひキかへて冠かむり装束そうそく重藤ぢゆうとうの。弓矢ゆみや携たづなへ。武官ぶくわんの粧よそはひ。奥おくの間まには菅三君すげさん。幼氣いんげしたる御冠かむり。天地てんち祈いのりの注連しゆめ引ひキはへ(67ウ)悠然おんぜんとして立給たてたまふ。貫つらぬ之一ひと揖事いっし終り。菅三すげさんの御事ごじは悉ことごとくも朝家あその御胤ごたね。御父帝ごふてい天下てんか乱らんるべき前表ぜんひやうを悟さとり。表おもてテ向むキは崩御ほうごと偽いつはりり水みづの尾おしの山寺やまでらに。御身ごみを隠かくし奉ほうるは貫つらぬ之のが計はからひ。我われレ叔父甥おぢおいの好よしみによつて名虎なめに随したがふ体たいに見みせ。是善卿ぜんしんの一ひとチ命いのちも先まキ達たて助置すけお仮かりの父ちちの身みにかはらんと命いのちを天あまに捧給たまふ。菅三すげさんの孝行かうかう心こころ。帝深ていふかく御感ごかんの余あまり。其發束しやうそくを下くだッし置おける、内勅ないちやくの御使ごし。国治くにまらば大臣だいじんの位ゐを授さづけ。今いまより菅丞すげしやう相道真さうだまと。名乗なをルべしとの御事ごじ也なり。名虎なめか妻つまの埋木うみぎ。我われとは縁有ゆかりル中なかながら。

さす敵の余類に菅三殿を預り置ク事。鶯の巢に鶯の雛鳥を与るごとし。今にも敵の招あらば裏返る心シ底か。(68才) 本心をためさん為。名虎が家来荒川隼人と仮名して。来りし我を貫之としつて。覚悟の此自害は。善悪わからぬ老女の心。包す聞んと有ければ。ノウ曲もない名虎に随ふ心ならば。何故に自害せん。廿余年以前シ位諍ひの時よりも。夫トの悪心シ見限つて暇取りしは。此武任が二つの年。親こそは悪人なれ。せめて此子は吉ツすいの。侍イに仕立テんと。誠有是善卿へ奉公に出すより。今の今迄其胤とは云聞さねは夢にもしらず。時去りて又もや名虎。一天に威を振ふ親共しらず朝敵を。ウト太刀討んと思ひ込其度々の母が苦しき。そなたの力で討ツ事はならぬといふたは爰の事。とても枉た種じや物。町人か百姓で置いた(68ウ) らかうは成ルまいに。よしない武士に仕立テたが今はそなたの仇敵赦したもと合す手に落る涙の。滝津浪。突込刃を武任がきり、くと引キ廻し。血ばしる眼くはつと見開き。女房を殺し。子を殺す。不便をこたへ忠勤を立テぬかんと思ひしも。水の泡と成たるはよつく。武運に尽果しな。親はとも有レかくも有レ。粉レの時より今シ日迄。菅原家の大恩を一ツ身に受ケたる武任。忠心は変ぜぬ。朝敵は現在の親。刃向ひならず。此世の武士道皆捨テる。所詮シ生キて忠義は立テられず。譬此儘死する共、魂は天に帰り。一チ念シの鳴雷と成ッて。菅丞相の御身の行末守るべしと。思ひ込だる。誓の詞。齒切り(69才) 齒た、き無念シの笈天に響て物すこし。

御幼稚ながら菅丞相彼レか心を感心シ有。ヤイ武任。墨絵に書ケ共雪は雪悪人シの子也。忠臣の名がけされふか。おことがわかりに源次郎道真が家来となし。二代の武任武部源藏と召シ仕はん。我カ年シも丑おそねとやらんも丑の年シ。思はず彼レが最期にて我災は遁レしが。定業ならぬ其証拠は。一度枯し松の枝。最前シ伯母君。地中に植置キ給ひしに。元トのあを

葉と成りたるこそ蘇生の印シ。守にかけし十一面観音の。功力に命恙なし。ヤア〜春彦。娘を是へと仰の下名イ香の香ふん〜と軒端の御方。春彦にかき抱かれし(69ウ)姉おそね。息吹返す反魂香の。威徳は爰に曾根の松。蘇生の松といちじるき。二度の夢見しごとくにて。と、様ばゞ様何としてひよんな怪家して下さつたと。すがる兄弟引寄せて。恥しや最前も。君に捧し柘榴の中。毒やあらんと有し時。若シ我カ素性をしろし召シ御疑ひかと疵持ツ足。昔の鬼子母神は。人の子を取くらふ。此ばゞが心一つで。孫を殺し嫁を殺し子を殺す。此世から鬼神と成つて。うかむ世さらに。有まじき我子よ母人。いざさらば。虚空に返す我魂魄。雷の神と成ル。奇特を目ク前シ頭はさんと。ゑぐり。くる〜紅の臍腑を掴んで引キ出し。柘榴を取て。口に含ではら〜と啮碎。はつと吐たる火(70オ)炎と俱に。松の梢も霹。しんどう。雷電雨霰。あら嬉しや。今こそ願シ望成就と。いふ声一チ度に引キ取ル息げに雷神の。さいごの様。貫之進で武官の役鳴弦三度物おとも頼て。静る太平楽。先ツ夫レ迄は。此地にも長居は悪シかり難波の地。幸イ直ク様春彦が。忍ぶ庵に御供せん。

元来我は神職の何国の浦へも渡会太夫。白井太郎が忠義を受ケ。名も白太夫と略姿の百性業引キ出す。牛の。綱手繩。召サる、君も。丑の年。うしや軒端の母君は。せめて三人りのなきからに。草葉の雪の手向ケ水。此家の名残り。世の名残りやがて。青葉のみどり子や。姉が蘇生は里の名に残る。一木の曾根の松神の。印シと成りにけり(70ウ)

第四

虐政は虎よりはげし囚れに醋を注ぐ。来俊臣か故事も今此時に当れるかな。悪逆日々に盛なる紀の名虎が新御殿敷多の

局つぼね召ま寄よせて酒宴しゆえんに時とききをうつしける。

大庭おほなまさして鳴川なるがわ平太へいだい立出たてだて頭かしらをさげ。兼かねて仰付おほいせケられし桂姫けいぎが有あり家尋出あきとさんと心こころをください。御所おんじよへ入り込こみ商人あきと共ども。其外そのほかカ町々まちまち徘徊はいはいする辻放つじほう下迄か吟味ぎんみせしに。中なかにも怪あやしき覗のぞきのからくり。見れば小ちいさい箱いなれど。千ちん畳敷じやうしきと申まをすからは。桂姫けいぎが其中そのうちカに入れて有あるまい物ものでもなし。詮せん義ぎの為ため二ふたつには。御慰おんぐさにも(71オ)ならんやと。只今ただいま呼出よびだし候まをすと云いつ、立たつてヤアあく者もの共ども。覗のぞき橋はし持参もちまのの下郎げらう。是こゝへくと呼よび出だせば。侍さむらい共どもが案あん内ないに。御前おんまへへ通とほる覗のぞきのからくり。竹田たけのく。千ちん畳敷じやうしきの大おほがらくりと。お定おさだりの口上くちがみに平太へいだいは覗のぞき見人みの役やく。仁にん体ていらしく腰こしかゞめ片目配かためくばつて。守まもり居ゐる。先まづ最さい初しよの始はじりは千ちん畳敷じやうしきの夜よルの体てい。奥おくの広ひろさが八万やちまん地獄ぢごく。待まちテ々々広ひろいかせまいか暗くらくてかいもく何なにンにも見みへぬ。コリヤ覗のぞく穴あなが違ちがつたか。イエく違ちがひは致いたさねど。何なにンにも見みへぬ其体ていが夜よルの景色けしきで候まを也なり。次つぎキは八百やっぱくやお七おしちの親達おやぢチは早正月はやしんげつの義式ぎしきの祝いはひ。お七おしちさんはや正月しんげつのくるのには。何なにをかつかりさしやんする。今時分いまときぶんは吉きちさんが坊ぼくさんに成なつて計はかるさしやんす。アレ向むかふのお寝間所ねまへ忍しのばんせ。わしやお使つかイにと走り行はしり。お七おしちは火燵かたうに転寝うたの。むつくと起おきて下着したきを脱ぬいで火かを包かみ。我われレより先まキに煙立けむりつ。次つぎキの代かくはん仰おほには。お七おしちとはわが事ことか。アイ私わがが事ことでござんする。顔かほをあげテモよい女房にようばうじゃ。われが顔かほを見るみるに付つても。中々ちんぢん火かを付くテそふな体ていでもない。付くテずは付くケぬと有あり様に申まを上あぐいと有ありければ。そんなら殿とのさん有ありやうに申まをしましよ。あんまり吉きちさんに逢あいたふて。ふうをちよつと付くけたれば。ちつと計はかこげたそふにござんする。もう此度このたび堪忍かんにんして。吉きちさんと女夫めをとにして下くださんせと。(72オ)あどないことを去さり迎むかは。袖そでで涙なみだをしほりけ

る。お七夫レは叶はぬはいやい。仕おきにせよと馬に乗最期所に着にけり。向ふは狗獨山わんく寺お七が檀那寺。鐘樓堂には吉三郎が鐘をつく。鐘をつけは経文シが初マる。経文シの功力にてお七は観音と頭はれます。是で先シのが入り替り。よいく侍共ソレ値をくれい。早立テく。あら値とは有り難や。御前を立テ田のからくりと。勇にいさんで帰りけり。お傍去すの百済の河成つくと出。御遊興の其間タわざとひかへおりました。彼乱性の金岡次キの間迄引寄せあり。御対面有へきやと伺へば。ヨ、一ツ天四海を手に握る此名虎。聖人の徳を備へし事を。普く人にしらせん為。賢聖の障子と名付ケ聖人の像を(72ウ)画せんと。数多絵師を求め共。金岡に勝る絵書キ今マ日本シになし。是へ呼と出せ我レ天下の威勢を以て。其氣違直してくれんと。高慢我慢の御詭意も。一ト声千シ里になり渡り。名虎が威勢類なし。爰に巨勢の金岡といふ画工有り。性得直なる者なれ共恋路に心責られて。狂ひ乱れし青柳の。糸も難面松にふる。時雨涙の。のんさてつらや。情に隔はなき物を。靡けくとふる枝の葉もちりぐに。なつかしや。恋しくと浮れしは。顔形には似も付かず百舌の雄鳥が金シ鶏の雌鳥乞る風情也。ヤイ金岡儻レ性根は乱る、共。手に覚へし画工の道忘れたるか何シとく。ハ、、、何の忘れふ。恋しいくと思ふきみの顔。寝ても(73オ)覚てもさめても寝ても。ヤ爰にも内裏女郎がたと有レ共。いかな似も付かず。見そめた人は。柳の腰付キ。顔は姫瓜こなたの顔は渋柿じゆくし。べつたりこけてたはいなし。平太河成詞を揃へ。かゝる狂人に大切ツ成ル賢聖の絵。書カさん事覚束なし。御賢慮いかと窺へは。ヨ、左程に思はゞ試に書カせて見よ。用意致せの詞の下。はつと答へて局達紫石の硯に墨摺たへ。犀毛の筆紙取り添。銘々奥より持つて出。サア御所望なざる、ぞ。認められよとさし寄ス。元シ来好る道なれば。にこく点頭居なをりて。筆追取れば忽

に。形容眼中廉直に。含みし墨の一寸霏。落て広がる菅原に。群ゐる鷺を輕書きに。(73ウ)さら〜と紙取りかへ。
色々四季の花尽し百の鳥類生けるがごとく。翅働き轉るかと怪しむ計り。心狂へど狂はぬ妙手。適寄代の名い画やと上
下一二度に。感歎せり。此上何か仕損ぜん弥々彼レに申付ん。ソレ々受領衣服をあたへよ。畏つて暫時の内。内藏寮
より取り寄せて。伝手に素袍かけ鳥帽子。着する。間々も手そ、ぶり袴の。襷積も狂ひ人を。追いのぼしたる花麗の殿。あ
なたへ走り。こなたへ行。ころつと横に高軒どつと興ずる折りからに。

お末の女手をつかへ。最前より菅原の奥方。御願カカひ有ル由にて御上り候と。いひも敢ぬに強氣の名虎。ヤア叶はぬ事を再
三に押し奉るは憎い女め。早ぼつ帰せと不興の面色。イヤ(74オ)暫くと河成り押しとめ。憚りながら某が存ずるは。

夫婦のやつ原引キ出し。責さいなんで手早き詮義。ヲ、夫レよからふ早く呼。鳴川は是善を是へ連レ来れ。はつと領して奥口
へ。知ラせ待ツ間も。久方御前。身は花捨し雁金の。雲井をたどる片翅。しほれ白洲に畏り。幾度も〜憚りさへ顧
ず。今もしも又替らぬお願カカひ。何率夫マをおゆるし有。御婦し給はらは御嬉しからんとひたすらに。手をさげ詞さげ髪も。
庭に埋もれ見へければ。ヤアそりや成り申さぬ。此度西国固めたる。摂州長柄の新関へ改めて押し廻れば。此後チ願とに出
られてからが仏もないどふみやく公家。此河成が連し行ケは叶はぬ願ひと聞ク悲しさ。何難(74ウ)波津へ送らんとヤコハ何
とせん浅間しやいかなる過去の報ひにて。かゝる思ひをなすやらんとくとき打伏シ泣給ふ。
実や汨羅に沈みたる。屈原が身を今爰に。我レのみ覚て是善卿。末つ方に籠られて。からきうきめにやつれ果無常を。く
はんじ出給ふ。

地の色上。のふいとをしの御姿、嘸や苦しう思すらん。世のなり行と云いながら。罪なき御身に災難を。受ケさせ給ふ悲しさに朝な夕な
に叩首て。祈りし神ミの恵もないか。難面の人も人なればうさもつらさも弁へぬ。など胴欲な此所爲少シは哀れ思ひやり。
自を替りになし我夫マ助ケてたび給へ。責ての情と計りにて人ト目も。恥ず軟かるゝ。ヤア悔まれそ愚なり。夫レ人間の身
のうへは(75才) 軟楽有れば哀情有り。善シ悪クは鏡にて光り曇りは有ルならひ。ちつ共悲しむ事なしと悟切たる御顔ばせ。
ヤア我カ前共憚らず尾籠也と引わけさせ。所詮当代に帰服せぬ頼魂。命を絶すは安けれ共。万シ事の法礼宝ラの有所。記
録の分ちも一々に問明キラめる夫レ迄は。殺しもせねば帰しもせぬ。万シ劫ふる共聞カぬ間は身うごきせぬ。畢竟三種の神
器と言も九重の飭同然。今新に拵へしとて何シの事。譬はゞ牛馬の藁轡を以。宝ラ成りと我カ云はゞ。唐天竺迄いゝ通す。
され共一ツ旦聞かゝつた恋路なれば言ハぬ泚其儘に置べきか。筋金挫いで言せにや置カぬ。ヤイ久方儕レに詮シ義は桂姫。入
内せねば違勅の科。何国迄も遁(75ウ) れぬゝ。誠夫トが助たくば姫が有り家を白状せい。落しやつたも儕レ等が工み
有口。何シとゝと難題に。遺の智者も恩愛の。姫の詮シ義に眼もくらみ。いかゞ有んと胸ネの中チ。千シ万シ無量思ひ子
の。行衛しらねば、自をとにも角にもなしてたべ。執成頼む人々とあなたこなたを伏拝み。庭に落くる涙川紅る。そゝぐ
ごとく也。ヤアしらゝ敷い偽り女郎。鳴川川そやつ手ひどく責い。ソレ女ナ原金岡を引キ起し賢聖の下タ絵をさせいとく
責鳴川早く書カせよ河成と。上エと下タとに眼を配り真中に巖石形。数多の病立チ寄てゆすり起せば。現にも。実狂人シの
こぼさぬ水。硯にさして墨色も濃と薄用紙引奇。又(76才) ぞ染なす筆勢も忘れぬ恋の。佛を写し書たる。姫の絵姿。
名虎乞見。ヤア氣違め賢聖の絵は書キもせず。女の姿はコリヤ何シじや。何ぞと人の間ならば。露ときさへても桂姫。逢いた

や見たや恋しやと狂ひ。廻つてどふど座し正体。なくぞ見へにける。

平太絵姿引つたくり。ム、すりや儕レがうつ惚たは桂姫で有たよな。幸い、狂気する程惚れた女。一心こめて書いたる絵姿。是を配賦に吟味致さば。何国におつても遁れぬ。コレ娘の姿見られよと。差付ケられて夫婦の人々。はつと計りに目を見合わせ。かほどに身を捨包め共。遁カれぬ姫が天災かと。心も落てうつとりとさし衰いておはします。(76ウ) 大臣いさんでヲ、出来た。狂人なれ共姫が顔見しりおるは幸い。難波の地には菅原の所願も有れば疑はしし。直クに立ち越エ詮義をとげ。其絵姿に引合せ首取つて来るべし。太刀取は鳴川平太。検使の役は其気違ひ。きやつめに首を改めさせよ。其時は善が帰洛を赦さん。先ッ夫レ迄は河成ぬかるな引ッ立て。早行兩人いそおれと。声も烈しき権勢の。下知に破竹ふり立ツる。月清けれど雲霧に隔られたる久方御前。我をも俱にとかけ寄ルを。官人ともめ動さず。あこがれ。狂ふ検使の金岡。しさいらしげに氣違ひの守りに鳴川河成に。追ッ立られて是善卿。同じ難波へ行ク足の。片葉計りに見残して。別れ。行こそ。便なけれ(77オ)

昔の京は。難波の京。今は長柄の里つぎ繁昌の地の往還に。鏡の中に女の姿絵おやま紅粉やの看板を。目当テに買イにくる人は棹に干てふ紅粉木綿。牡丹紋りも富貴なる。根分ケに夏を隣同土色を諍ふ植木屋の。鉢植石臺生ケ船に金魚銀魚や紅粉鯉の。鱗に黄金を咲せけり。

身は玉簾に育しも恋路に曇桂姫。表テ向キは白太夫が女房分シと見世の番。最早お中カにいと島の似合ふ姿もならをより馴して働舎人之助。畠の草を取々に手桶提振如露も。水際の立ッ男ぶり。イヤ是木助。アノ橙はなぜ二つ三つ残ッて

有ルヤ。エ、植木やの女房でもいかゝる素人。あの種を取つて畠へ蒔ば。来イ年シは石キ（77ウ）台へ植る様になります。お前にもソレ去年ン六月に下した胤が。此月で丁ど十月の産月キ。草木でも人でも。子を産ムに替りはない。懐胎の間はいねるにそば立ず。立ツに片足立テせぬといふ。ほうきを放さず。眼に怪しい物を見ず。畠でもそろくあるひて。身を遣カカふが養生の第一。サイノ。今朝から気色が悪ルさに。世を忍ぶをつい忘れて。いつ見てもうきくと。面白さふな舍人様。隣の紅粉屋の娘御がな。アノお前の事をと。云もあからむ夏紅葉。ア、イヤそれはこなたがしのぶを植エる榮螺の廻り気。植木屋とお師宿して。二人リを養ふ白太夫其手前も有ルに榮曜らしひマア返事所か。紅粉やの娘に箔（78オ）が置いて有ツても。植木や男の分ン際で。それがまあどふならふ。ア、これひよんな声が高い。ム、ひよんな事ならひよんの木を。どりや植かゑふと鋏提。裏の畠へ走り行。

春は往来も。大坂の色里から赤前垂の詠へ物。在所衆は。寒のべにはけ口多きおやまべに。商イ仕廻ふてべにやの娘表テに出。おみき様。けふはマア珍らしい見せの番と。詞をしほに寄り添いて。私しやお前に。アノちつと頼たい事が有ルと。差稟いてはぢの木の照葉むしれば。ヲ、小桜様。其様にマア照葉むしつてマ木助が見たら呵ろぞへ。御頼なされたいとはア、お髪の毛の事かいな。わたしは此月産ミ月なれば手が上ケられぬ。此横町に傾城の果が出ツ世する客ふりすて、。（78ウ）可愛男と添てじやげな。其傾城が女中の髪結て夫トを養ふとやら。其人ト頼んで結ふてお貰ひ。アしたが髪は悪ルふても。おやまべにやの娘御は。器量よしじやと世上の噂と。なふられて手をもぢく。エ、悪ル口云イないな。お前に頼ミたいと云フはな。アノ内方の。フウそんならアノ木助の事かへ。アイどふぞあの人ト取りもつてと。跡は詞も柳の葉に。顔をそむけ

る恥はづしざかり。ヲ、けふと。マア何事じやと思ふたれば。此三木に仲人なかつとせいかへ。いかにべにやのお娘御じや迎あんまり早
い色事。そりやマア云つて上ふけれど。母御様がお聞キならば念ねんシ仏にする隣となり同士。私が顔が合されぬ。そして此中じ
きく返シ事は木助がとふ仕しやつたへ。サアあの人の云ハしやる(79オ)にはな。首尾はるさへ有ラはどふなりと。フウどうな
りと、いふたかへ。コレ木助。くくと。呼よばあたふた舎人之助。お三木様何シの御用。いや別ツの事じやないわいの。此子
がそなたを取もつてくれとの頼み。此三木が取り持いても。首尾を見合せどうなりと、いやつたげなの。夫つまをさつきによ
そくしい。覚へのない顔付キと。目には涙を持ちながら。怪気う妬ねたみは下々より腹立チ見へし。茨いばらの花。エ、悪いお聞キな
され様。此中小桜様の云しやるには。べにやの商売には紫むらさき朱あけを奪うばふと云て忌事なれど。菖蒲あやめか杜若かきばたの花一ト本ほんくれいと
有ル故。首尾を見合わせどふなりと、申シた分シ。イヤくく。菖蒲杜若とにつこらしういやれ共。念ねんシ比せふといやつた
に違ちがひはない。ほんにほんほにせど門で。男(79ウ)も遣カハる事じやないア、是申。其様に産ミ月に。お腹立テられては返
つて妨さまたげ。サア。マアくく気をお鎮しづめ。遊あそばせと。いへ共ともきかぬ腹立チ声。コリヤ叶かはぬと。逃にげ込ム切戸。
べにやの母は何事とつかは表あテに走り出。小桜何とぞしやつたかと。いへと娘は我カ身からおこりし事と得も云ず。諾なな
ければ。フウ扱あは男衆お呵あなさるゝのか。いやもふ人をつかへば苦くをつかふ。殊ことにお前は只ならぬ身で其様に腹を立テる
と。短期たんきなや、が産うまれるぞへ。マアくく御堪かた忍にん。サア聞いて下さりませ。私が所の木助が。有ふ事かどこやらの娘御を。
そ、のかして徒いたづら。今でこそ商人あきんどなれ。夫は伊勢では名有ル人。こんな事聞カれたら木助は隙ひまが出やうもしれませぬ。又娘
御も娘御。(80オ)年シはもいかいで嗜たしなんだらよいわいなナアお雪様お聞キなされて。下くださりませ垣がき小柴垣しほ一ト重へだ隔たて。あて

こすられ娘もうちく。もじくと申シか、様わたしは覚へなけれ共背尺延じると袖つま引カレ浮キ名が立ッ。是といふも独身故と母に寄り添薦かづら。壁訴訟とぞ。見へにける。

母はそしらぬ顔付キして。いやもふ若い者は有ならひ。恥を云ねば利か聞コへぬと。私も十八九の若盛。比子の爺御にふと馴染小桜を設け。子忌も明カカぬ其中チ主は遠い旅他国。比子も私も其時に生キ別れ今において便りもなし。水くさい事ながら合せ物は放れ物と十六年別カれていれは。夫トの顔はどふやらと行キ違ふてもしらぬがち。何が何やらしれぬが浮キ(80ウ)世。お三木様も腹立テずと一寸先キは闇の夜に。提燈ともしてあるこそへ。蹴躓てもお腹の住居がかはるげな。ほんに私とした事が。挨拶に来て懺悔咄し。サ娘戻りや。お三木様。後にお出をしほにして。打連レ内へ帰りけり。

跡に。うつとり桂姫。口で言れずくよくと愠気妬の。胸ネの闇。ドリヤ見世の番かはらふと。何心なく来かゝる木助。ヤアお三木様。御気色が悪いかして。どふやら済ぬ御顔持。ソレ御らうじませの。何ンでもない事腹立て。持病の積がおこつたかとせな撫さする。折リも有。

太鼓土拍子横笛にて町々廻る太々神楽。先に立ッて白太夫雇人に。神楽荷持せ。サア戻つたくと内入のよきにこく顔。ヤアこなた衆も神楽荷を。穢ふ隙(81オ)のない奥の間へ直して置イていんで貰を。ソレ木助伝へく。ヤア女房共。又持病か何としたぞい。只の身でもないに。此風吹に不養生。春寒いと秋肚饑はこらへられぬ。ヤアおれも肚饑ソレ女子共茶を涌せよ。扱渡会の白太夫といふお師の髪束から脱て。是から植木屋の権九郎といふ商人。一身二名で身はひとつ名は二つと声を響め。扱桂様。舍人様もサ、、爰へく。かう申たらお気の障にならふけれど申さにやならぬ。此長柄に関所を

すへ桂様の有家をさがし。お前を尋出す迄御父是善卿様を関所に人質。此難波の浦々へ。名虎が方より配賦が廻り。桂様は網代の魚。ヤア其魚で思ひ出したはい。へに鯉は(81ウ)あがりはせぬかの。木助ソレ水をかへておけ。サイノ。其べに鯉ゆへに。自ラか積の種そりや何の事じや。サ其べに鯉が。ハ、ア聞コへたコリヤ鱗じやな。但は産月てお気が上り。おやつ様な事おつしやるのか。わたしが先祖も代々のおやつ筋伊勢内宮のお師。猿田彦の神孫此白太夫も時々はおやつがつております。ヤアおやつ次手に気違ひか何やら尋に来るといふて町々の噂。そこでわたしも弟君。菅三様を神楽荷に入まして。彼私か親類河内の佐太からお供して帰りましたが。ア、流石文章のお家にお生れなされて自然の物しり。いや又此白太夫も。お主様を女房(82オ)にしたり舍人様を家来にしてつかふのは本に冥加恐ろしい。かふ致すもお主の大切さ。白井太郎武任が雷と成つて守護するも皆お主への忠義。ヤア長カ咄して丞相様のお待兼ねと。いふ中ちに早桂姫産の氣付て苦痛の体。ヤアこりや奥へはやられまい。幸いべにやの奥座敷。日比の懇意は爰の事。ア、いや。隣は娘の事ハテサテ舍人様何おつしやる。此期に及んで遠慮はいらぬと。手を引き裏の。栢の木ヲ伝ひ。此栢にあやかつて。男の子お産遊ばせと。切戸開てべにやの座敷産所に伴ひへ入にけり。恋路に迷ふ金岡がく命や限りなるらん。我一年去御所へ絵を書に参りしに。(82ウ)さもやいとなき上臆を見初。其俵を絵に写し。肌身放さぬ恋ヒ人の。其顔ばせを三津の浦。其名は月の桂姫。絵図に合して尋出し。姿を爰に空蟬の。もぬけの狂ひ人左右には割竹持つて下タ司。鳴ル川平太が引ッ添て俱に乱る、不狂人。ア、朽木の桜さへ。八重九重に咲ク物を。中に流る、桜川。花も紅葉もちりしほが有ルとの。迎もちるなら。風に任せてちれかしなぞそれは子故に迷ふ親。恋しき人か花ならば。此流にてかづき上。月を救は、おのづから。月の桂や救はん。あた

ら桜のウ科トガはちるぞ恨ウラミ泣ナ。べにやの表ナラス地ハルテに立ウチ寄ウりて持ウつたる姿ア絵引アキ合せ。ア、嬉ウしや今アこそ願アひ金岡アが。其ア恋人アは是ア爰アの。鏡カガミの中カカに有カり明カの(83才)月の桂カヅと小桜カに。しなだれ寄カつて抱カキ付カ。余カ念カたわいも鳴カル川平太カ。家カ来引カ具カしかけ入カて娘ウのかよはき両手ウを取り。引ウ立ウればのふ悲ウしや。是ウか、様ウと泣ウク声ウに驚ウき母ウもかけ出ウて。コレウくく。こちの娘ウを何ウとすウるのじや。イヤ面ウ倒ウな。名虎公ウよりお尋ウの桂ウ姫ウ。不ウ義ウ徒ウで入ウ内ウを嫌ウひ勅ウを背ウキし女ウなれば。親ウ是ウ善ウも長柄ウの関所ウに擒ウとなる。下ウ万ウ民ウの見ウせしめに此ウ姫ウは刑罰ウと。引ウ立ウる娘ウに縋ウり。桂ウ姫ウとはまんさらの人ウ違ウひ。イヤ違ウはぬ其ウ證ウ拠ウ。姫ウか佛ウ写ウせし絵姿ウ。サア絵ウが有ウふがとふせふが此ウ子ウには爺ウも有ウり。母ウが産ウんだに違ウひはなし。外ウカを御ウ吟ウシ味遊ウばして。娘ウが命ウチお助ウケと。手ウを合ウせかきくどく。物ウの哀ウも物狂ウひすつくと(83ウ)立ウてけらく笑ウひ。生ウケて置ウケば入ウ内ウさす桂ウ姫ウ。どうでも此ウ恋叶ウはぬか。思ウひ切ウつたる輪廻ウの紐ウ。結ウぶ妹背ウの黒髪ウは誰ウが子桜ウや児桜ウ。わけて楊貴妃ウ伊勢小町ウ。月の桂ウを桐ウが谷ウ。平ウ太ウが指ウシ添ウすらりと抜ウキさかりをまたぬ小桜ウが。首ウをあへなく切り落ウすわつと泣ウク母血ウ汐ウにて。朱ウに染ウたるお山ウべに姿ウを鏡ウに残ウしけり。ハレすでつほうな氣違ウひめ。すつぱりとこりや出ウかした。名虎公ウの御成道ウ始め違背ウの者ウにはよい見ウせしめ。桂ウ姫ウが最期ウの上ウは。長柄ウの関所ウに擒ウと成ウりたる父ウの是善ウ。明早朝ウに御赦免ウ有ウん。御褒美ウは追ウつて御沙汰ウと。首ウ取り持ウせ立ウチ出ウれば。なふ今暫ウし災難ウで死ウたる娘ウ。最ウ一ウ度顔ウをと取り付ウを踏ウ(84才)退蹴ウ退鳴ウル川ウは家来引ウキ具ウし立ウチ帰ウる。始ウ終ウのわけを白太夫ウ暖簾ウの影ウより走ウり出ウ。母様ウのお歎ウき御尤ウ。御取ウり込ウの其中ウでひよつと産ウれたら氣ウの毒ウ。マア連ウして帰ウりませふ。みすくウの門ウト違ウひと思ウへど云ウれぬ背ウ中に腹ウ。お三木様ウの氣ウが付ウいたと奥ウの間ウでひしめく声ウ。立ウつにも立ウれず白太夫ウ居ウル所ウさへ泣ウキ入ウ母ウ。立ウチ上ウつてつかくウと胸ウぐらをしつかと取ウり。コレ金岡殿ウ。百濟ウの河成ウが娘深雪ウ。十六年ウ以前ウあふぎの

別れをした女房見知ッてか。イヤおれは何ンにもしらぬ乱心。イヤ氣違ひごかし置いて貰ふ。コレ譬にも氣違ひは水こぼさずと云物を。水ももらさぬ親と子のいかに狂氣したる逆。胤腹わけた娘(84ウ)の小桜よふもく切ラしやつたのふ。そしてマア唐から戻つて妻子の所へは寄り付す。他人に勝つたけんどん邪見。娘は母に付ク物を。なぜ氣儘に殺しやつた。娘返しや。く。く。返らぬ事とは思へ共。夕部迄も今朝迄も。か、様わしにと、様はなぜないや。ヲ、追ッ付ケ逢してやらふといふたりや。嬉しそふににくくと笑ふた顔。目先キに。ちらく見る様な。今の先キ迄にはいて猪口持チながら殺された。首なき死骸に抱キ付。前ン後もわかず泣けるは理りせめて哀なり。

狂氣の金岡娘の最期母の歎きに目もやらず。伊勢内イ宮の社人猿田彦の神孫。玉串大内人の二男渡会の春彦。息災に有ッたなと。云に恠り白太夫。(85オ)扱は巨勢の家相続の為。養子と成ッて行キ給ふ兄金岡殿。ヲ、幼少で別れたれば見しらは尤。某十六年以前画工の奥義極めんと。唐土へ渡り帰朝の折りから。大納言宗岡我レを招き。当今の玉体を画。調伏せよとの手詰の難題。空恐ろしく勿体なさ。筆を持つ手もわな、く計。帝調伏の天罰にて。狂氣せしと名虎をあざむき。河成に縁を引ク女房。当歳で別れた娘見知らふ様はなけれ其。此鏡の絵に筐の相イ紋。扱は此家に有りけるよと知ッたる金岡。此絵に合せて桂姫の姿絵を。娘が姿に書きなしたは敵キの眼ン前。繪筆に刃金はなけれ共子を殺す氣の乱焼。狂氣(85ウ)でなふて切れふか。我レも菅家に所縁有れば。弟に忠義を立テさせふ為計。親の悪事を見限つて音信不通の女房娘。不便ンや産れて爺親共娘と云ぬ親と子の。短い縁と知ッたらば。せめて一チ度は抱キ上て我カ子よ親よと云ん物。こらへてくれよと金岡が恩愛の悲しみに筆の命毛切レ果て胸を隈取ル子故の間。悔歎けば女房もそんな事とは露しらず。又の筐に下さつた

齋宮の別れの櫛。姿絵につまぐしをさゝせ置キなば此家に。娘がゐると思し召し尋て見ゑふと思ふた故。爺御をこがれる小桜に逢さふ為に書いたのが。返つて娘の命を取ル看板で有たかと。しやくり上く歎けば（86才）夫トも諸共に。流す涙は春雨に花の。ふりしくごとく也

早丑満の時キも過。隣地色ウの切り戸押開き舍人之助の声として。丞相色是へ来臨地ハルと。しらせに驚く白太夫。穢不浄をはらひ退ウケガレんとお雪に死骸片タ付ケさせ。はらひ給へ清めて給ふ太祝詞。産家の障子引色キ立て。入ル間程なく皆丞相。十三才の児わげに位ウもそなわつて見へ給へば。金岡はつと頭カウをさげ。敬ウじ申せばしづくともうけの褥シトネに座し給ひ。巨勢コセの金岡とは其方よな。娘を捨て桂姫の一チ命を救ふといひ。又是善卿の囚トシハれを遁給ふもおおことが情ケ。子を殺す親心。我カ父母の御めぐみに思ひ合せて比恩シウを。生々シヤウ々々も（86ウ）忘るまじと御落涙地ハルに金岡も。コハ冥加なき御詞と。畳に頭をすり付スエけて恭涙中悦ハルびの。初ハル声ウシ高中く奥ハルの間に。桂姫様たつた今御平産と。知ウラせの声と諸共にいそく出る白太夫。申ウく桂様の御平産ハは。一ト人リならず二人ならず三人の御男子。三つ子は天ハル子の守とやら目出たい御産の産子にめんじ。姉君地ハルは久しぶりの御対面ウツをと伺へは。三人詞リながら堅固とは珍ら敷誕生。天下の吉事去りながら。桂姫は今ハル日ハル只ハル今。名虎が為に命を失ひ此世になき人。暫くも其方が妻と呼ハレれし其人トの。腹ハチに懐りし三つ子なれば白太夫が子となして。我カ愛イ木クの松梅桜。三ン木クを名に呼シて天子の舍人トネリとなす古例。産地ウだる母も吉例に。女御ウ後の御平産ハルに子を（87才）取り上る桂姫。我カ姉とは云ハいながら。唐土ウツの聖人セイの教へ。三十にして娶ウ時は必父母に申と云フ父の卿の赦しもなきに夫トを定ハす。齒ハを染し密通ミツツウの誤り。天レ故に是善卿の身を苦しむる不孝の姉君。兄弟の名乗りをせぬは父への憚り。此後地ウ迎テも桂姫不義に染たる鉄漿カを兀ハし。

元トの白齒はと成り給はゞ其時対面致すべしと一ツ句の道理に舍人之助。恐れ入りたる天ツ神ンの廿五日に鉄漿付ケぬ。世のいましめは是とかや。

金岡はつと感じ入。凡人ならぬ御發明に思ひ合せし事こそ有し。某画工の修行の爲唐土へ渡り。照宣皇帝に交つし候に。日の本菅原の家に聖人出て。文学まなぶと聞き及ぶ。此好文木は文ン学盛の時は色香をまし。(87ウ)又襄ふ時は花もおのつと色香を失ふ。唐襲束と諸共に。菅三に値へよとの御事也と首にかけたる唐襲束。好文木の一ト枝を菅丞相に奉れば。夜前我れも此事を。見しは正しく正夢ぞや。唐帝の賜おろそかに請がたしと。押し載カき給ふにそ白太夫横手を打。唐迄聞コへた御秀才。育ましたる我れ等迄。猿田彦の子孫ンにて鼻高く。迎もの事に此襲束を召かへられ。文章の規模となし給へと。舍人之助立寄りて召せ。替ウエたる唐襲束。冠ンに有ラぬ輪巾。深衣の裔踏シたき。携ウへ給ふ好文ン木ク末世に唐渡の天神トと。尊み尊む御神ン願フ今フ此時としられけり。

金岡しさつて拜をなし。某帰朝の其砌。故郷なれば伊勢両(88オ)宮へ参ン詣せしに。宗岡が徒党のやつばら。宮人トと成ツて御奉納の錦の御旗奪取ルを。某横合より奪かへし候と。差出せば舍人之助。我れ流浪の艱難も此御旗の紛失故。武運開くる紅の。べにやの店の物ほしさほ。時に取ツての簾竿とさつと押し立。日ツ月ツの帝の威勢をまつ先に。官軍ンをかり催ふし。ヲ、紀の名虎を亡ぼすは我方寸ンの胸に有リ。只此上に心せくは是善卿の御身の上。姫に替りし小桜が首を関所へ持行ハば。父は赦され給ふと聞ク。夜も早七つ明迄は今一時。半時ニても父君に。苦しみ請させ奉ルは子の身として半ン時の不孝と。悔給へは白太夫。兄者人は聞フルる名画。禁庭庭にて書カれし馬。夜なク(88ウ)出で萩の戸の萩をくふたる例も有リ。鶏

絵書時を作らば鶏鳴也と関所を開。是善卿の御赦免は必定。函谷関の吉例サア。遊はせと傍の染地紅粉筆を。是幸と指シ寄れは辟するに。及はず金岡も。調伏の絵は非義なれ共。是は正しく孝の道。実一心を凝しなば。などか時を作らざらんと。べに筆追ツ取りさらくと画鶏忽に。絵絹を放れ羽た、きして飛上り。嘉慶幸くと時を作れば辺りの鶏。俱にうたふも金岡が。名画の誉と炯然。丞相甚御悦ツ喜有。関所の様子はいかゞそと障子を開見給へば。北に当りて長柄の関所。門を開いて並ミ木の影。数多の松明高提燈。警固の武士前後をかこみ。是(89オ)善捕はれ御赦免有り御帰洛有ぞと声く呼はる声は風につれ手に取ル様に。聞コゆるにぞ。イデ御迎ひと菅丞相。金岡兄弟供奉の役。舍人殿は此家に残り。姉君の介抱頼み頼まるゝ。母が袂は難波江の涙にひたす。身をつくし哀にいと丞相も。御目うるみて小桜が。菩提の為の糸桜一枝手折地中に植。桜が女人成仏せば。枝葉栄へて盛なんと。唱ふる御声提婆品跡に初声三津の浜。よしあし曳の山かづら名にしながらの橋ばしら。朽ぬ孝心いさほしを。書キ伝へたるもしほ草。筆の冥加も荒人神。扱こそ天満大自在天神と仰れ。給ふぞありがたき(89ウ)

第五

玉を改め行を改む今此時。紀の大臣が悪逆四海轟かす。車の前後に付。随ふ橘宗岡百濟河成り鳴川平太。其外官人仕丁迄權威を鼻にのさばりくる。
地ハル中キキ。紀ノ大臣ガ悪逆四海轟カス。車ノ前後に付。随フ橘宗岡百濟河成リ鳴川平太。其外官人仕丁迄權威を鼻にのさばりくる。
中にも宗ね岡押柄頬。ヤア今日大臣加茂へ御社参は知つらんに。御ン下向の道筋何やつなれば車を横たへ。慮外なる女郎はら。アレ引キのけよ者共と無法の下知にばら。女ナと侮官共ほたへ半分傍若無人。恥しそふに女房達チ。テモ

まあやさしいお人達。邪魔に成ルならそつちから除て通つて下さんせと。取地ハルれし腕かいなを振り放し首筋つま抓み手玉のごとく。はらりくくと投ケ（90オ）付クれば宗岡色怒いかつて。ヤア女詞とゆるせば狼籍らうぜきもの者。打地ウチ殺さんと鳴川河成追ハルッ取り巻。こなたも銘々絹脱捨中ればこはいかに。女ウに有ラで金岡舎人白太夫ハルふんちかつたる其有様。大地ハルきにけでんし狼狼眼うろたいた。それ打ウチ取レと入り乱レ拔キ連ハルれく切ツてかゝる。ヤア干渴詞におどる小鰯いはしめら首引キ拔カんと大手をひろげあたるを幸イこな微塵みじん。蹴地ハル上ケ蹴ウ飛シはつたく刀もぎ取りかたつばし。大げさ竹割ハルやゑ無む尽じんなき立立。三重上へ切り伏レれば一ト人リも残残らず死死てげり。

サア是地ウからが鯨くじらの大魚もり籬は是是ぞと拔ハルキ身を車車へなげ付付く。イサこい合合点点えいやうん覆くつがへさんとする所所を。

中中チより車を蹴蹴やぶりく頭あちはれ出る名虎ハルが形相きやうさう。六天魔王ウの怒いれる（90ウ）両眼ウ。くはつとにらむをことともせず。

我我レ組ミとめんと三人ハルシが。進すめど高官勢に思思はず跡跡へたちくく。すぐウに付ケ入入飛飛とか、り苦くもなく三人踏倒ふみたをし。足下そくかに踏ふゆる折中りからに。こなたの車の内内よりも飛ハルとくる一一ト矢。宙ちゆうに掴つかんで打中捨コれば。不下思議しきや一一ツ天ちんかき雲ハル。篠しのつく雨風どうくく。草木吹折ウル霹靂はた、かみ。どうど落中たる猛めつ必はの丸はかせ。名虎ハルが五体ごたい二二つにさつとわけ雷いかづち。鬼神ウシの怒い天てんの責せおそろしなしななどもおろかなり。かゝる所ハルへ。菅丞相跡中に続つづて紀いの貫ハルラ之ハル官官シシ随したか馳は来せつ。ヲ、目出度目しく。惟高これたかの親王みこ今今ぞ誠まことトの御得道とくだう。手もおろさず（91オ）朝敵滅ちやうてきめつし。偏ひとへに加茂の御神徳地ハル。有有り難たししくと車中に向向へば。御簾卷上すテて天皇ウは。龍眼殊れうがんじゆにうるはしく。御悦喜並居ウる人々も。はつと敬うやま奉たり再またび御位みゐイ九重ここのへに匂にほふ梅うめが香か萱げ家の栄さかへ。天満神あまつかみと今の世よ迄み威徳いとくを。慕したふ国民こくたみも。実じ樂たのめる御代成よルはと語かたり伝つたへて尊たつとめり

近松半二

明和六^巳_丑年

近松桃南

作者連名

正月廿七日

松田才二

三好松洛（91ウ）

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

師若針弟子如縷目吾儕所伝沂

先師之源幸甚

竹本義太夫博教

予以著述之原本校合一過可為正本者也

大阪土佐堀裏町

加嶋清助版（92才）